



Osaka Gakuin University Repository

Title	あるがままの自分と成る幸い――教育学徒の内界巡礼(2) – About my Blessedness in Becoming Myself as I really am : A Pilgrimage to one Educational Theorist's Inner World (2)
Author(s)	井上 専 (INOUE MAMORU)
Citation	大阪学院大学 国際学論集 (INTERNATIONAL STUDIES), 第 22 巻第 1 号 : 19-41
Issue Date	2011.06.30
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

あるがままの自分と成る幸い
—— 一教育学徒の内界巡礼（2） ——¹⁾

己れとぞ 成るはかくもや 妙なるか いざ語らばや 尽くしえずとも

井 上 専

**About my Blessedness in Becoming Myself as I really am :
A Pilgrimage to one Educational Theorist's Inner World (2)**

INOUE MAMORU

ABSTRACT

In educational context it is often spoken what a person should be and become, while rarely questioned what it means that a person becomes him/herself as he/she really is and how this experience can be understood. In the point that a special sense of wonder, freedom and blessedness accompanies it, the self which I mean here seems to be differed from the self in usual condition where a person worries about him/herself and others, or struggles with something outside in everyday life. How on earth can we describe, however, this whole experience of becoming oneself ? This paper tries to treat this theme by stating my case and interpreting it, namely in a form of a kind of self-analytical autobiography.

The whole description of this paper is written in a dialogical writing style.

1) 副題と内容全体からわかるように、本稿は『ダイアローグへの道——教育学徒の内界巡礼一』（『大阪学院大学国際学論集』第21巻第1号、2010年所収）と一体とも言える文章である。話題の中心となるのは、40歳頃から筆者が経験したとある大きな内的変化である。

・プロローグ——とある午後のひととき——

「お昼の食事会の後、君をこうして誘ってみてよかったよ。立ち寄ったこの寺院でもひとときわ晴れやかに感ずるなあ。」

「私も思い切って来てみてよかったわ。守井君にもう少し尋ねてみたいこともあったし。」

「おや、果たしてどのようなことだろう。そこの縁側に掛けて話そうか。」

「前回一緒にお話しした後、あらためて守井君のいくつかの文章を読み返し守井君の振る舞いも思い返してみたけど、まだどこか合点がいかないようで。」

「特にどのあたりにそう感ずるのだろうか？」

「守井君を見ていると、自分の思いのままにしているような自由さが感じられるけど、無理してではなくのびのびと楽しんでいるようにさえ感じたの。だから・・・。」

「だから？」

「守井君という人そのものに生じた変化はまだ他にもあるのではないか、そういう印象が後々まで尾を引いているの。」

「確かに君の言うとおおり、40代序盤からここ最近にかけて僕に生じた最大の変化の一つについてはこれまで触れる機会がほとんどなかった、こう言わざるをえないね。」

「やっぱりそうなんだ。でも、それは一体どのような変化なのかしら？」

「敢えて言ってみると・・・、あるがままの自分に成れたこと、そしてそのすばらしさと幸いを嘸み締めている、ということになるかな。つまり僕にとって、『あるがままの自分と成る幸い』は人生の宝ものを見つけたくらい大きな経験だ、そういうことだね。」

「『あるがままの自分と成る幸い』？すぐにはイメージがつきにくいわ。」

「では、『本当の自分と成る幸い』と言ってはどうだろうか？」

「そう言い換えたとしても、正直言って相変わらずの印象よ。だって『あるがままの』にせよ『本当の』にせよ、何らかの意味でずっと自分は自分であったとすれば、なぜわざわざ『成る』必要があるのでしょうか？そ

のことが人生の宝ものと言えるほどの幸いと結びつく、その所以もすぐにはわからないわ。』

「君もやはりそう思うか……。すでにその君の反応からもわかるけど、実際のところこの経験がそもそもどの程度語り尽くせる性質のものか、訝る気持ちが今でも強いんだね。」

「そうは言っても少なくとも何か手がかりがあれば、きっと今以上に釈然としてうれしいけど。」

「よし、ではどこまで語れるかやってみようか？ただ、そのためにはある工夫を凝らす必要も感ずるなあ。」

「それはどのような工夫？」

「この経験の描写そのものから直接入ってゆくかわりに、自分が人生のなかでどのような側面に一層の注意や気遣いを払ったお陰で、そしてどのような過程を経た末この経験に至ったと思えるのか、こう進めてみてはどうだろう？」

「その経験が一体何か、つまり what を直ちに語るのではなく、どのようにしてかという how の方からアプローチするかのようには聞こえるけど……。いいわ、守井君が語りやすいと言うのなら私はそれでかまわない。」

「それはよかった、ひとまず僕も始められる気がするよ。」

「ここにこうしていると、内に秘めたままにしてあったことや深遠なことにも、普段より一層思いが及ぶ気がするわ……。」

1、心の声、省察、行ないの一体化 —— 幸い経験に寄与したこと ——

「先程『あるがままの自分と成る幸い』と名づけてみた経験だけど、この経験をする上で大きなはたらきをした、つまり寄与したのは一体何かと自分に問うたことがあるんだね。」

「うんうん、それでそれはどういうことだったの？」

「自分の心の手を大切にそれには聞き従った、まずはそう言えると思うんだ。心の手って、あるがままの本当の自分の有り様を示すとは思わないかい？」

「心の声に聞き従うってどういうことかしら？まず、心ってよい言葉だと思うけど、いろいろな側面がありそうですぐにはわかりにくい言葉でもあるわ。守井君の言う心って具体的にはどういうもの？」

「ごく身近なことで言えば、ある事柄がとても好きだあるいはその逆だということには、心の大切な部分が現われると思わないかい？例えば、ある人にとってとても好きなものがあるとして、それをそろそろ味わいたいっていう声のようなものが、ときとして胸のあたりから聞こえてくるのが竹本さんにはないだろうか？」

「わかる気がするけど……。でも、心の声って簡単には聞き分けられないとも思うわ。だって、好きなのか嫌いなのか状況次第ですぐに変わる場合もあるし、その他にも好き嫌いに関わらずこうした方がよいとか、こうすべきだという声も心から聞こえる気がするもの。」

「つまり僕が言うのは、好きのなかでも状況次第ですぐ変化するようなものではなく少々では変わらない、例えば心底好きだと思えるようなものことだね。これについて語るのが心の声だ、そういう意味なんだ。」

「心から惹かれ愛着を感じるということをイメージすればいいかしら。」

「そうそう。実際にそういう事柄を味わい経験したあとには、深い感動や感慨のようなものが湧き、余韻のようなしみじみとした幸福感に満たされるのが竹本さんにもあるでしょう？」

「では前回いただいた守井君が文章のなかで、意義深い経験と言われていたものはそのことと関係しているのかしら²⁾。」

「僕が意義深い経験と呼ぶのは、そのような意味で自分にとって価値があり大切に、かと言ってその深い意義を容易には捉えがたいような経験である、こういうことだね³⁾。」

「私の場合もそのような経験が幾つか思い浮かぶし、まずそこまでは受

2) 「教育人間学とその文体について」(『大阪学院大学国際学論集』第20巻第2号、2009年、P.41-43)、「対話調という文体について—教育人間学探究からの一報告—」(『関西教育学会年報 通巻34号』、2010年、P.18)等参照。

3) この点は、欧米語で『大切な、意義深い』を表わす significant (英)、bedeutsam (独) という言葉が、文字通りには『幾重にも意味しうる、含蓄深い』を意味することに通ずるところがある。

け入れてみるけど・・・。ただいくら容易には捉えがたいと言っても、私の場合なにかそれだけではもの足りない気がするわ。この経験をもう少しクリアーに掴んで、本当にそう感ずるのか、もし本当ならどうしてそう感ずるのか、こう知りたいと思うもの。」

「折角感動・感慨を感じる経験だから、もう少しクリアーにしてどうしてそれほど大切だと感ずるのかその含蓄を掴んでみたい、このような意欲が湧くということだね？」

「確かにそのように思うわ。」

「それは心の声から自然と発する頭への意欲だと思うんだ。」

「心がハート、つまり胸だとすれば、胸の声から頭への意欲が現われるということね。でも自分の内にある経験の場合、外側にあるもののようにそこから距離をとって分析することが容易ではないでしょう？この場合の頭の働きってどのようなもので、どのようにして心の有り様がクリアーになるのかしら。」

「話しを具体的にするために例をとってみてはどうだろう？今でもありありと思い描けるような『心に残る学生時代の一日』なんてどうだろう？」

「わかったわ、ちょうどこのシチュエーションなら一層ありありと思い浮かべられそうだし・・・。」

「ではその経験は一体どのように君に現われるだろう？何か特別顕著な一つのことをすぐさま君の胸に浮かぶだろうか？」

「その日の経験全体が思い浮かぶように思うわ。なにかすべてが溶け合い、色調のようなものがぼんやりあって、とにかく『よい一日だったわあ』って感じる。」

「まずは経験の全体像がぼんやりとした輪郭や色調のなかで浮かぶわけだね。それから？」

「なかでも特に印象深いこと、あの・・・つまり当時心惹かれていた人のことがくっきりと思い浮かぶようだよ。あの日の面影やしたり言ったりしたことの大よその内容も。」

「ふーむなるほど・・・。ただ君のその大切な人も経験全体の一部だというから、別の部分もいくつか現われるわけだね？」

「その日の空模様、場所の有り様、そこへ駆けつけた自分の心境などがまざまざと現われる気がする。」

「つまりこういうふうにつえられるようだね。まず心に浮かんだ全体的な印象を頼りに、一つの点に自然と注意が向けられ、それを皮切りにその点と関わった幾つかのポイントが現われる。」

「そのように思えるわ。」

「その後はどうだろう。こうして順次思い浮かべられたものを、もう一度全体のイメージに照らし合わせて、本当に全体をそうとらえてよいかと自分に問いかけるようにするのは？」

「もしそれで最初の全体印象と齟齬があれば、どの部分が違ってどう修正すればいいかしら、そう思い巡らすように思う。」

「僕が自分の感動・感慨を覚える経験について頭を巡らす場合もおよそそれと同様なんだね。この場合の頭の働きは分析や思考と呼ぶより、心の声をよく省みて、その声を察するような種のものであるようだね。」

「では、省察と呼ぶのが適切なのかしら。」

「それは適切だと思うね。一般に言って、心が意義を認める声大きい経験ほど、それに比例してこの省察への意欲も大きくなる気がするんだ。」

「それにさほどの異論はないわ。」

「だから、心の声に聞き従うことはこの省察への意欲も大切にすることでもある、つまり心の声大きいと察する経験を、別の事柄や経験にかまけて後回しにせず、むしろできるかぎり優先して頭で捉えようと思いつくことでもある。これが『あるがままの自分と成る幸い』に寄与したことの一つである、こう思うんだね。」

「心の声と省察をなるべく一体化するということね。でも最後の『一つである』というところは気になるわ。なにかこれ以外にも大切なことがあるの？」

「心の声を大切にすることは手や足を大切にすることでもある、こう続くわけだね。」

「手や足？もしかすると行為や行動ということ？」

「心の内にあるものが自然と外側に現われたものという広い意味で、『行

ない』と呼んでみたいね。つまり心の声から出てくる行ないへの意欲もできる限り自然に発現するということだね。」

「うーん……。でも、どうして心にあるものをあらためて行なう必要があるのかしら？」

「では思い出してご覧。僕の文章のなかで音楽や別の例を挙げて、受動的に享受しているだけではなく能動的にやってみると、感動や感慨の大きさが随分と異なる、そう述べたところがあったね？⁴⁾」

「そういう箇所があったわ。」

「音楽や他の芸術に限らず、一般に感動・感慨が湧く経験に触れたときもまずは身体的兆表が表れるのではないかい？例えば先程君が思い描いた経験でも、しみじみと感慨がわけばころなしに胸が震えることがある。」

「鳥肌が立つようなこともあるし……。」

「なんとも幸せそうで紅がさしたような面持ちに自然な笑みが浮かぶことも少なくない。先程の君もそうだったね。」

「やだ、私そのようなふうだったかしら……。」

「涙が滲むことも少なくないし、知らないうちにゆったりとリラックスした深呼吸のような息遣いが現われる。」

「息遣いだけでなく慨嘆するような声も現われることも少なくないわ。『やっぱりあの日はよかったわあ』とか『本当によかったわあ』ってつぶやいている自分に気づくことがあるもの。」

「では、どうだろう？それほどの経験なら、親しい人の前あるいは自分の感動・感慨を語ってよい場面なら、生き生きと詳しく語り描いてみたくならない？」

「そういうことってあると思うわ。でも守井君の場合は、授業でもそうなることがあるんじゃない？確か文章に出ていた気がするもの。」

「僕の場合授業も日常の大きな部分を占めているから、意義深さを感じる経験は自然と語ってしまうことがあるんだね。まずは言葉にそのよすがとなるものも交えて描こうとするけど、しだいに行ない全体で表現し、そ

4) 『「カラオケ」を大学で活用することの意味—体験的实践からの緒論—』（『大阪学院大学国際学論集』第20巻第1号、2009年、P.133-136）

の場で感動・感慨を味わいたくなる⁵⁾。」

「でも正直言って授業のように、経験をすぐに共有できるかわからない多くの相手の前で、行ないで表わすには勇気がいると思うけど。」

「もちろん行なう際には周囲の状況、シチュエーションを顧慮し判断することは必要だよ。」

「状況によっては相手から誤解を受けたり齟齬を買ったりすることもあり得る、そういうことでしょうか？」

「ただ逆にこのシチュエーションへの顧慮は、感動・感慨を抱いているあるがままの自分を必要以上に抑制するブレーキや言い訳に繋がるのが少なくない、そう感ずるんだね。」

「慎重なたちの人なら自然とそうなりやすいと思うけど……。」

「そういう抑制をかけ過ぎていつでもどこでも言わないし行わないとなると、心の中から嘆き悲しみのようなものがしばしば聞こえるんだ。」

「一体どういう嘆き悲しみなの？」

「心の声を大切にするとしながら、心から発して自然と外側にも現われようとするものをひた隠しにするかのように、さほどの行ないでも表わさないのですか？それほど行ないに注意が向くのなら、心はさほど大切ではなく、実のところ行ないの方が大切なのではないですか？例えばそのような嘆き悲しみだね。」

「うーん、少しわかる気はするけど……。」

「逆に言うと実際に言い行なうことで、ありのままの自分を認めてくれてありがとう、そのような心の喜びが胸に伝わるのが少なくないんだね。」

「実を言えば、ここ最近の守井君の振る舞い全体のストレートさにどこか気押されるところもあったけど、少しその所以がわかった気がするわ。」

「もしそうならうれしいよ。君にわかってもらえれば、その思いはひとしおだね。」

5) 筆者の言うダイアログは、こうした状況で生ずることが少なくない。「教育人間学とその文体について」(『大阪学院大学国際学論集』第20巻第2号、2009年)、「対話調という文体について—教育人間学探究からの一報告—」(『関西教育学会年報通巻34号』、2010年参照)

「・・・あの、ともかくここまでの話しをひとまず振り返ってみましょうよ。心の声と省察そして行ないを・・・。」

「その三者をばらばらに分散させて、例えば心からの意欲が湧かない経験について、無理に自分を説き伏せるかのように省察に没頭しようとしたり、同じようにして行ないに心血を注いだりしようとせず、心の声の大きい経験から優先して、この三つを一体化しようと心がけること。『あるがままの自分と成る幸い』に少なからず寄与したのはこのことだ、そう言えそうだね。」

「なるほど・・・。ところで守井君、ここのお庭本当に気持ちを和らげてくれるようね。」

「本当だ。折角だから見ているだけでなく、二人で踏み入りもっと間近で味わってみようか。」

2、人間的脱皮ということ —— 幸い経験へのプロセス ——

「生命をもったものたちの瑞々しさや息遣いが一層伝わってくるようだね。」

「本当、こちらの気持ちまで活気づくように感ずるわ。そのお蔭もあってか、尋ねてみたい事が一層見えてきた気がするの。」

「ほう、それは果たしてどのようなことだろう？」

「まず思い浮かぶのは・・・。守井君が言うような種類の幸いは、一体どのように人生の宝ものと言えるほど大きな価値に繋がるのか、こういうことかしら。」

「どうしてそのように思うのだろう？」

「だってね、人生には他にもいろいろな種類の幸いがあるように思うし、それはあるがままの自分を語る心の声と繋がっているのか、もしそうならどう繋がっているのか、わかりそうでわからないもの。」

「その辺をもう少し語ってゆけば、僕がこの幸いに至ったプロセスを一層クリアーにできるかもしれないね。では、君の言う別の種類の幸いとはどのようなものだろう？」

「えーと・・・、今の私よりこうなったほうがいい、いやもっとこうなるべきだっていう声はどうかしら。その声に従って、今以上の自分に成ることだって、少なからず幸いに繋がると思うわ。」

「君の言う今以上の自分についてももう少し語ってみてくれるかい？」

「ほら、今の自分に欠けていることやまだ足りないと思う点を、一層補ったり克服したりしたほうがいいと思うことはないかしら？そして自分の能力や性格が一層向上したと思えたとき、幸せを感じることだってある気がするわ。」

『『今以上の自分と成る幸い』だってあるし、この幸いだって大きいのでは？そのように聞こえるね。』

「人間的成長が大切だって言われる場合があるでしょう？⁶⁾今言ったような意味での成長もまた一層の幸せに繋がるのではないかしら。」

「ではこちらも尋ねてみたいんだ。」

「どういうことかしら？」

「竹本さんの言う人間的成長のためには、自分の外側から何ものかを吸収したり蓄積したりする必要があるのだろうか？」

「ときにはそうすることが必要だと思うけど。」

「それならば心の声に従うことは、人間的成長と十分にはそぐわないと言わざるを得ないね。だって、それとは逆のことが大きな幸いに至るプロセスと不可分だったと思えるのだから。」

「逆のことって、吸収ではなく外へ出すとか、蓄積でなくて捨ててゆくようなこと？」

「40歳前後から、自分の心と省察と行ないが一体化していないものは手放し、脱ぎ捨てるようにしていったと思うんだよ。」

「すぐには想像しにくいけど・・・。頭の面でも行ないの面でも、これまでの人生で守井君が外側のもものを吸収し蓄積したことがあったわけでしょう？まさか、そうした内容のすべてが否定され、捨て去られたということなの？」

6) 以下で話題になる「成長」「成熟」については、多岐に渡る学問上の学説・言説というより、ごく一般的な日常的イメージを念頭に語っている。

「過去でも心の声に従ったと思われる部分の自分はずっとの自分の一部であって、それは今のあるがままの自分のエッセンスとして残り、躍動するかのように生きているのがはっきりわかる、そう思えるんだ。」

「うーん、そうなの……。では、守井君の言う『もともとの自分』は40歳あたりより相当以前にまで遡ることができるということかしら？」

「そう思えるんだね。ただ具体的にどう語ったらよいだろう……。」

「守井君の文章には、どこかでそういう守井君のもともとの姿が現われていると考えていいわけでしょう？」

「綴るテーマとその内容にはもともとのあるがままの自分が色濃く反映しているように思うね⁷⁾。」

「では、守井君が綴っていた異国体験はどう？あの文章のベースになっている経験はかなり最近のことよね。」

「あの文章には、旅が好きだということもとの僕の姿が相当現われていると思うんだね⁸⁾。」

7) 以下で話題になるトピックは、次の文章に表わされた筆者の姿である。

「異国に住むこと、人の成長—スイス・ヨーロッパをめぐる一つの対話(1)—」
〔大阪学院大学国際学論集〕第19巻第1号、2008年)「異国に住むこと、人の成長—スイス・ヨーロッパをめぐる一つの対話(2)—」〔大阪学院大学国際学論集〕第19巻第2号、2008年)、並びに前掲の「『カラオケ』を大学で活用することの意味」を参照のこと。なお、最初の二つの文章のタイトルは「成長」という語を含んでいるが、通常の「成長」というイメージとはかなり異なる語感も含めて筆者がこの語を用いていることはその内容全体から推察いただけよう。

8) スイス・チューリヒ滞在中、その時々に関心と意欲の赴くままに訪れた主要な地は異国体験について綴った二つの文章内で直接触れられているもの以外に以下の通りであるので、滞在したおおよその延べの期間とあわせて挙げておく。ギリシア(アテネ、デルフィ、ミコノス島、ロドス島、パトモス島、エペソ〔トルコ領クシャダシ〕等、約7日間)、イタリア(ローマ、アッシジ、フィレンツェ、約4日間)、ドイツ(ベルリン、ヴィッテンベルク、ライプチヒ、アイゼナハ、ワイマール、フランクフルト、チュービンゲン、ウルム、コンスタンツ等、約10日間)、フランス(アヌシー、シャンベリー、パリ、モンモランシー、ヴェルサイユ等、約10日間)、イギリス(ロンドン、オックスフォード、ストラトフォード・アポン・エイヴォン、リヴァプール等、約8日間)。スイス国内の小旅行では主に以下の土地を一度ないしは二度訪れた。インターラーケン、グリンデルヴァルト、ユングフラウヨッホ、ベルン、パーゼル、アツメニヒ、シャフハウゼン、サン・ガレン、バーデン、マイエンフェルト、クール、バート・ラガッツ、サン・モリッツ、ポント・レジーナ、シルス・マリア、ヌーシャテル、シュタンツ、モントルー、ヴェヴェイ、ローザンス、ツェルマット等々。

「旅？身近な生活圏を離れて遠出することよね。見知らぬ地の風に吹かれ、心の赴くまま、そんなところかしら。そう言えば守井君学生の頃かるときに一人でときにお連れと旅にでかけていたようだし、30代でも日常を抜け出しては大自然を味わったりいわゆる史跡・文人ゆかりの場所に出かけたりした様子を友人から伝え聞いているわ。」

「僕と旅の関わりは、もっと幼い頃まで遡るように思えるね。家族と住む町は好きだけれどそれだけでは飽き足らず、もっと遠くへ行って今以上の何ものかを味わってみたい、そんな意欲を抑えられず、実際に思い切って出かけてはいろんなものと出会い、ふと、どうしてこの風景や活動にこれほど心惹かれ心躍るのか、その意味をぼんやり考えていた自分がいると思うんだね。」

「熱中しやすい子にありがちなように、遅く帰ってきては親御さんを心配させたこともあったんじゃないかしら？」

「自分が思う以上にあったようだね。学生の頃に外国の言葉や文化、風景や自然に興味をもった事にはそのような自分の有り様も働いていたように思うんだ。」

「あの文章で意外だったのは、守井君が慣れない外国でも固定した計画や軌道の内部でだけではなく、その時々自分の思いに従うかのように生活している様子だけど、その所以が少しわかる気がするわ。ではカラオケについてはどう？守井君がこんなにカラオケが好きだったことも意外だったし、これこそ比較的最近のことでしょう？」

「カラのオーケストラを背によく歌い始めたのは比較的最近だけど、音楽全般、そして歌うことの大好きな自分はもともといた気がするんだね。」

「そういえば、知人の結婚式のときもギターを弾きながら数人で歌を披露していたのを思い出したわ。のびのびと歌っては味わっている守井君が今でも髭髷とするもの。でもそれ以前はどうだったのかしら・・・。」

「中学・高校の頃について言えば、レコードを聴くだけで飽きたらず、楽器を手に入れては一人で演奏して歌い、どうしてこんなに感動するのかもう少し掘みたいと、お気に入りのアーティストの本の助けを借りてぼんやり考えていた自分がいるんだね。仲間とグループを組んで練習し小さな

コンサートに参加したこともあったよ。」

「小さい頃から音楽がよく心のなかに流れていて、たえず鼻歌を歌っているような少年だったって、そんな話しをいつか聞いたのを思い出したわ。」

「音楽好きの傾向が自然に残り、むしろ人生の前面に出てきたと思えるわけだね。」

「では守井君が今のようなスタイルで教育人間学を探究しているのも、守井君のもともとの姿と関係があるのかしら？」

「こちらからもあらためて聞くけど、竹本さんから見て僕という人間の全体的な印象はどのようなものだろう？」

「・・・守井君ってどこかナイーブなタイプだと思うけど、ここぞというときは自分の思っていることをやってみる人だった気がするわ。少し周りを驚かせるくらいのもときもあったでしょう？」

「そんなことがあったかなあ？」

「私たち気の合うクラスメートと一緒に、楽しいお付き合いの時をときどきもったでしょう？でもあるときは・・・」

「あるときは？」

「私一人を誘ってくれて、一緒に紅葉の美しい滝を散策したことを憶えていない？あの時守井君ってこういう面もあるのかなって、少し意外でも本当はうれしかったの。」

「あの喜ばしい日のことは僕も相当はっきり思い出せるなあ。」

「他にも・・・、学部の専攻分野を選ぶときだって、知り合いや仲間の多い少ないにかかわらず自分の意中のところに一人で決めてしまったじゃない。」

「考えたり思いを馳せることが好きだけれど、これはというほど意欲がわくことは思い切ってやってみて体験せずにはいられないのが僕のようなだね。やってみながら、どこまで自分のイメージ通りその事柄に感動するのか、だとすればどうしてかを考えているようなところがあるから。逆に言えば、やってもみずに意欲を内に秘めたままだとか、考えているだけというところにどこか満足できない者のようだね。」

「ももとの守井君は心の声、省察、行ないがどこか結びついている人で、それが今の探究のスタイルの前面に出てきたということだったので……。ここまで聞いていると、確かにここ最近の守井君の変化は人間的成長というイメージにフィットしないよね。一層大きくなるとか広くなるという感じではないから。かといって内側のものが次第にずっしりと結実して、なんともよい風味に熟するという意味での成熟でもないようだし……。」

「十分に自分であるとは思えない部分を手放し、シンプルで身軽になっていった感じだから両者ともどうも異なるね。」

「ではそのような変化を一体どういう言葉で捉えればいいのでしょうか？」

「うーん……。ほらそこにアゲハ蝶が舞っているだろう？あの蝶が蛹（さなぎ）から出てくることを、脱皮っていうよね。」

「脱皮？夏の蟬にも起こるあの脱皮のこと？」

「あの脱皮にかなり似ている気がするね。僕は人間的脱皮というプロセスをくぐって、あるがままの自分と成る幸いにたどり着いた、こう言ってはどうだろう？」

「もう少し詳しく話してもらいたい印象だけけど……。」

「では思い描いてごらん。蝶のように脱皮するものは、自分にとってすでに一体とは言えず外面的なものようになった固い殻を脱ぎ捨て手放してゆくけど、その結果殻の内側にあった本当の中身、本当の内実が現れるわけだよ⁹⁾。」

「それはわからないわけではないけど……。多くの場合脱皮って瞬時に起こるわけではなくて、一定の時間経過のなかでしだいに成虫が現われるわけでしょう？守井君の場合もそういう経過があったのか、それとも一気に自分が変貌したのかしら？」

「例えばそろそろ綴り時だと思える一つのテーマに取り組んでいると『ももとの自分はどういうことが好きな人間で、それを味わっているこ

9) 筆者がいくつかになっても必要な食事を外から摂取するのと同じように、脱皮するものも幼虫、蛹、成虫の時期を通じて外から栄養を摂取するが成虫のための基本的な内実はもとからある、脱皮という表現はそういう事態を比喩的に表わすものである。

こに自分の姿がありありと現れている』、そのような感動・感慨を味わうとするでしょう？¹⁰⁾」

「うん、それから？」

「この感動・感慨を頼りに、別のテーマ、そのまた別のテーマを一つ一つ綴っていったその一步一步の歩みの中で味わわれる、『やっぱりそうだ、自分は本当にこういう面のある人間だ』という経験の繰り返しのなかで徐々に自分のありのままの姿が一層現われてきた、こう思えるね。この点でも生き物の脱皮に似ていそうだね。」

「イメージは増してきたけど、それでは……。」

「おや、でもちょっと待ってよ。君の帽子にアゲハがとまったようだ。こうして静かに、しかしぐーっと近づいて……。」

「あらっ、逃げちゃったみたい。でもそのわりには守井君の表情がほころんで見えるわ。気のせいかしら……。」

3、魂という妙なる次元の顕われ —— 幸い経験の有り様 ——

「うーん、蝶は少し残念だったなあ……。ところで、竹本さんの口ぶりではまだまだ尋ねたいことがあるようだけど？」

「ふふ。あの逃げたアゲハ蝶にしても、脱皮するものってそれまでの蛹や幼虫からすると想像できないほど見事な成虫が現われることが少なくないでしょう？」

「そうだよ。確かにそれまでとは根本的に違った印象を与える、飛躍的だと目を見張るほどのものが現われる場合が多いね。」

「では、守井君の場合に蝶の成虫のように現われたものを一体どのように捉えればいいのかしら？」

「いよいよ僕の幸い経験の有り様、what を語る段になったようだね。つまりそれは……。自分の心に無限と思える世界が開かれた、こう言ってはどうだろう？」

10) 「ダイアログへの道——教育学徒の内界巡礼——」（『大阪学院大学国際学論集』第21巻第1号、2010年、P.53）

「無限と思える世界？ なにか途方に暮れるような言葉ね。だって今まで語ってくれた守井君の姿にしても、守井君という一人の人間の生き方と結びついているわけでしょう？」

「全くそのとおりだね。」

「だとすれば、それはオールマイティーでオールラウンドを思わせる無限という言葉とはそぐなわいような気がするわ¹¹⁾。」

「アゲハ蝶がいくら見事だといっても他の生き物になれないように、僕の場合も自分の輪郭、そういう意味での限界って当然あると思うよ。それはきっと心の意欲そのものの輪郭に根差しているはずだけど。」

「とにもかくにも、守井君という人間には一定の輪郭があるということよね？」

「ただ、その輪郭がある自分の中に無尽蔵な内容が秘められているにちがいない、確信をもってそう思えるような次元を見出した、そのことを無限と思える世界と呼んでみたんだ。すでにかなりクリアに見える部分、おぼろげに見えているけど十分に捉えて形にできていない部分、それどころか今はほとんど気づいていない部分もここには含まれているように思うけど。」

「ますます謎めいた印象が深まった気がするけど……。ではそういう世界の中で少しでも見えている部分をいくつか教えてくれない？」

「『自分が創る楽曲』という部分は少しずつ形になって見えてきたものだね。」

「自分で楽曲を創るの、守井君？ どういう機縁で創り始めたのかしら。」

「慕わしく思う人・場所への思いをどうしても表わしたくなった折々に少しずつ詩と節回しを創りはじめたんだね。出来上がった曲を歌ってみると、技巧的かどうかは別としても自分の気持ちが表われた自分らしい曲だなあと思えるんだ。どんな時に、どんな対象への思いを込め、僕はどんな楽曲を創るのか、これは見えはじめたようでまだまだ奥行がありそうな、心を惹かれる主題だね。」

11) 『ダイアローグへの道——教育学徒の内界巡礼』(『大阪学院大学国際学論集』第21巻第1号, 2010, P.54参照。)

「楽曲にはそれを創る人独自の世界が相当な幅や奥行をもって表わされる、そう考えれば無尽蔵という守井君の言葉が少しわかる気がするけど。でも他に少しでも見えている部分はどのようなもの？」

「『エロスとの付き合い』という感じの部分もそうだね。」

「エロス？ 確か『愛』と訳される場合が多いけど、肉体を超えた愛であるアガペーとよく対比される肉体を含んだ愛のことよね？ どうしてこういう部分が見えてきたの？」

「ありのままの僕にとっては肉体を超えた愛だけでなく肉体を含んだ愛もまた、大きな潤いや推進力を与えると感ずるわけだね。」

「では守井君はいわゆる性欲とか、性衝動のようなものを中心に語ろうとするわけかしら？」

「確かにエロスの経験は性欲や性衝動というような内なる動きに根をもっているようだけど、同時に精神的、メンタルな部分を含んでいてこの両者が相まって『ああ、たまらないほどいいなあ』と感ずる経験ではないだろうか？」

「むきだしの快を求めるような欲望に、なにか人間的なものが含まれているという意味？」

「欲望は放埒で見境のないようであり、例えばいつまでたってもそのよさを忘れることのできない『あの人』、『あの場面』に対する深い愛着やときめきは、そうとうメンタルでピュアな部分を含んでいる、そうは言えないだろうか？ この人のためなら少々の犠牲を払ってでも何かをしたいと思うこともあるよね。」

「人間が異性に惹かれ愛着をもつ経験は、性衝動のようなものとアガペーのようなものが同時に含まれたトータルなものということ？」

「そうだね、両方と重なる言わば中間領域としてエロスをとらえてみて、エロスの経験との関わりが僕に対して持っている意義深さを浮き彫りにできたらなあ、そう思っているわけだね。」

「どこか怖いようでもあり少し覗いてもみたい部分かもしれないわ……。でも別の部分もあるわけよね。」

「『戦いの論法』というものも一層現実味を帯びてきた部分だね。」

「戦い？違った意味で恐そうなテーマね。どのような意味で守井君に現実的となってきたのかしら？」

「ほら自分が大切に思う関心事で収穫や成果を収めて前進しようとする、周囲の誰かと目標や利害が競合して軋轢をきたすことってまれじゃないでしょう？」

「穏便、穏和にゆくことを望んではいても、確かにそういうことってあるわね。」

「お互いが一步も引かず、もう待たないの状況に至ればここに戦いが始まる。修羅場のような状況だね。そこで勝利を収めよう少なくとも惨敗は避けようと両者が思えば、押したり引いたり相当人間的なやり取り、駆け引きが繰り返されるでしょう？」

「実人生ってスポーツのゲームと似ている面がある、私もそうふと感ずることがあるわ。相手の出方を見て策を練り、機を見ては迫力をもって攻勢をかけたり、相手の隙や意表を突くようにして自分の活路を開いたり、そうかと思えば相手の意気をそらすようなことをしてみたり、仲良しやよき理解者に接近して上手く事が運ぶ方途を探ったり・・・。」

「反則ぎりぎりのこと、判定者の見てないところでの反則だってないわけではない。いわゆるお人よしなだけではとても人生を渡って行けない、そう多くの人が思うのではないだろうか？」

「確かにそう感じることも少なくないわ。」

「でも、もともと必ずしも相手が憎くてしようがないから始まった戦いでないなら、決着をつけるときも相手を再起不能ほどたたくかどうかはよくよく顧みるよね。自ら望んだわけでもなく今回あなたと戦いに立ち至ったけれど、私は自分を賭ける思いで歩んでいる自分の道をまっすぐにゆきたいだけなんだ、そう思えば自然と情け心が湧くことが少なくないからね。」

「いわゆる武士の情けというものよね。」

「とはいえ再び戦いで相まみえることがあれば今度だつてとことん全力で戦うぜ、そうひしと胸に思っている。このような自分もまた生身のあるがままの自分だなあ、そう思うわけだね。こういう意味で、戦いという場

面で自分と他者が織りなすやりとりの有り様・仕組みを一定程度描ければ、こう思っているんだ。その他にもえーっと、あと二つぐらいは見えてきたものが……。」

「あの、わかったわ。守井君の心の世界には見通しがたいほどの内容がありそうだ、その様子的一端はわかるわ。わかるけど……。」

「わかるけど？」

「いくらそのような世界が開かれたという守井君でも、まさに生身の人間でしょうから、あたかもすべてを超越したかのように喜怒哀楽の感情を持たなくなったわけではないでしょう？その点でも無限という言葉は通常の人間の様子とはどこかマッチしない気がするの。」

「生身の人間だからこそうれしかったり困ったりしたら喜怒哀楽の感情の起伏が生じる。この喜怒哀楽がなければある人が人間的だとは僕には思えないから、その意味でこういう感情は僕の人間探究の血脈だとも思うよ。」

「『にもかかわらず』とすぐにでも言いたそうなそぶりよ、守井君。」

「そんなふうだったかい？ほら、ここに大きな海があったとして……。」

「うん、想像してみる。」

「たとえ表面には頻繁にさざ波が立ったり時には大きな波が立ったりしても、その深くはシンと静まって大きく動くことがない、そういうことがあり得るよね。」

「人が究め難いような深みを満々と湛えている様子をイメージすればいいのかしら？」

「それと同じように、日常生活で遭遇する外側のことによって心の表面が波立ち感情の起伏が生ずることはあっても、少し落ち着いて心の奥に注意を向ければ、そこにシンと静まって満々と水を湛えた深みのような自分を感じて、ゆったりとした安らぎや喜ばしさを得ることができる、そんな実感が以前より大きく増したと言えるだろうか。」

「イメージが全く湧かないわけではないけど……。」

「だから、日頃自分が喜んだり憂いたりしている事柄は、こんなに深く揺るがない自分の根本に関わるかどうか、落ち着いて吟味することが

できるということでもあるんだね。」

「そういう意味では以前よりゆとりや余裕が増したということになるのかしら？ そうだとすれば、守井君の自由でのびやかな印象の所以も少しわかる気がするけど。」

「確かに自分の外側に由来するものに対してはそうかもしれないけど、内側に由来するものに対しては我慢したり、耐えたりする場面に一層直面するようになった気がするんだ。」

「内側からのものに対して耐えるってどういうことかしら？」

「海の深くはよく見れば決して無なのではなく、生命の豊穡が広がっていることがあり得るでしょう？」

「生命の豊穡って、いろいろな魚や生き物をイメージすればいいのかしら？ 確かに色とりどりで、形も大きさも異なる生命あるものたちが満ち満ちていることがあるわよね。」

「どこかそれに似て、自分の内側から湧く多様で無尽蔵と思えるほどの生命的なもの、そしてそれをなんとか形にして自分の目で確かめてみたいという意欲によって、あたかもたえず迫られているような心地がするんだね。」

「へえー、でももう少し具体的に言ってくれるとうれしいけど。」

「例えば、僕が一つの関心テーマに注意を集中しようとしていると、同時に別のテーマがどうして自分にも注意を向けてもっと大切にしてくれなのか、そうかと思えば別のテーマがどうして私をないがしろにするのかのように後回しにするのか、そのように悶々として僕にせがむような声を始終感じる、こういうことだね。」

「先程挙げてくれたいくつかの部分も守井君にたえずそういう声を投げかけてくるわけね。」

「少なくとも三つのテーマには始終求められているのを感じるし、その底には無限のような心の意欲を感じる。この内からの熱い意欲で頭と身体が今にもはちきれんとするところをなんとか宥めるようにして、自分を休めることにはこれまで以上に大変さと工夫の必要性を感じる、こういうことだね。」

「でも守井君の場合、自分が好きで価値があると感ずる心の部分から求められているわけだから、きつとうれしい悲鳴を上げるような心境かもしれないわね。」

「喜びに耐えると言えば逆説のようにも聞こえるけど、そのようなことが昼夜を問わず生じているのは、どこか不可思議にも思えるね。」

「無限という言葉のもつ不可思議な語感ともようやく少し関連がみつかるような気はするけど。」

「僕という生身の人間としてはどこか異次元と思えるような、時間と空間を越えたように心の中に生ずる世界という意味では、この世界を『魂の次元』と呼んでもよい気がしているんだ。」

「魂の次元？確かに魂という言葉は、人間の心的な面を保持しながらも時間と空間に完全には拘束されていない何ものかをしばしば表わすわよね。でも魂と言えば、通常の人間の力を越えた何か大いなる存在と結び付けて捉える人も少なくないのでは？」

「その大いなる存在について僕がすでに究めたとは到底言えないから、それが一体何かをここで言い表わすことは憚られるけど、この幸いの経験は大いなるもののお陰だと思える、そう言ったとしてもあながち嘘とはならないよ。人間にとって大いなるものからの有難い寵愛と感ぜられるもの、つまり恩寵という言葉の理解は一層深まった感ずらしているんだ。」

「恩寵？うーん、これもどこか途方もないニュアンスを含む言葉ね……。恩寵とまで言わなくても、守井君が人より努力したとか曲がりなりにもよい人間となったから、その結果思わず知らずそういう次元に触れることができた、そうは思えないのかしら？」

「若い頃から本当に自分を満たすことができるもの、自分の心の故郷と呼べるものを求めて模索し努力もしたつもりだけど、自分の力でしてきたつमりの模索・努力ですら、もしかすると実は恩寵の賜物だったのかもしれない、そう思えるほどこの世界の不可思議さ、そしてすばらしさは深く大きい、そう思うんだね。」

「うーん、そうなの……。私今ふと英語の wonderful という言葉を思い出したわ。『不可思議なこと、奇跡的なこと』を表すのが wonder だけど、

その程度が大きく満ち溢れるほどであると wonderful となり、意味も『すばらしい』になる。そのような感じなのかしら。」

「日本の文語で言って、まさに『妙（たえ）なり』と思えるんだね。不可思議で妙（みょう）だと思えるほどすばらしいということだね。」

「でもいくら不可思議とは言っても、それはもともと守井君のなかにあったものだという意味では、魂の次元が顕わとなってきて、守井君が次第にそれに気づき、それを見い出したと言えるわけかしら？」

「そう言うのが適切だね。だからひとまず僕の幸いの経験をまとめてみると、『あるがままの自分と成る幸い』とは、あるがままの自分がその魂の次元にまで達して顕れ出た際の妙なるほどの幸いである、こう言えるのではないだろうか¹²⁾。」

「なるほど・・・、蝶の成虫に匹敵する目を見張るような世界はそのようなものだったの・・・。」

「ところで竹本さん、この経験に関連して最近ふと思うことがあるんだ。」

「それはどういうことかしら？」

「蝶が脱皮を経て本来の姿に成ったその究極の姿を『成虫』と呼ぶとすれば、今言ってきた意味で人間が本来の自分になれたと感ずる状態を『成人』と呼んでもいいのではないか、と。」

「『成人』？一般には年齢や特性・能力の面から語られることが多いと思うし、逆に守井君のような内的経験の可能性に言及している人はあまり多くないかもしれないけど・・・。」

「僕のこういう経験世界の可能性も含みこんだ『成人』のイメージ形成はないものか、あるとすればそれは一体どのようなものか、これもまたときに心に浮かぶ関心事の一つなんだね。」

12) どれだけ注意していても生身の人間がときに何かにつまずいて転び、どこかを擦りむくことがあるのに似て、こういう心境に至ることで心に比較的大きな波が立ち、その結果いわゆる失敗や危険と思われる事柄に至ることが全く無くなることを、以上のことは意味しているのではない。転び擦りむくような思いをしたとしても、だからといって立ち止まってしまうのではなく、例えば「こういうことは起こるものだ」と立ち上がってもう一度顔を上げて——おそらくはじめは幾分慎重に——歩を進められる、そのような思いが大きく増したことを意味している。

・エピローグ

「首尾よくできたかどうかは別としても、とにかくここまで語ることができてホッとした気分だよ。今回も眼前にいる理解ある問答相手は寄与してくれた、こう言わないではられないね。」

「私の方もそのような深遠な心の世界があるのになって、思いを馳せることができたわ。前回は守井君の大切な内面を訪れるという意味でまるで内界を巡礼するような気持ちだったけど、今回は神秘的で聖なると言えるような場所を訪れたという点では内界巡礼という言葉が一層適切だ、そのように思うわ。」

「聖なるとは畏れ多い言葉だけど、こんなあるがままの自分でさえ、いやあるがままの自分であったからこそこれほどの世界に与ることができたのなら、これからも自分であり続けて残りの人生を堂々と胸を張る心持ちで歩めたらなあ、これは大げさでも有頂天でもなく、偽わらざる心境なんだね。」

「お天道様の前を堂々と、そんな心境なのかしら。燦燦と降り注ぐ日差しのもとで先程までのびやかに舞っていたあのアゲハ蝶と、守井君の内面世界のイメージが一瞬重なって感じられるようだよ……。」

「とはいえそのお天道様が傾きかけてさやかな風も漂いはじめたようだね。そろそろこの場所を立ち去ることとしようか。」

「ええ、そうね。そうするしかないよね……。」

「ただ……、思い切って言えば僕の心が何かを今叫ばんとしているのをひしひしと感ずるんだ。」

「それはどういう叫びなの？」

「このまま君と別れるのは名残り惜しくて仕方がない、どうもそのように聞こえるんだなあ。」

「守井君、私も……。私もできればあなたともっと一緒にいたいわ。でもだからと言って、私たち一体これからどこへ向かおうかしら。」

「それならまさに『風に吹かれ、心の赴くまま』、こうしてみてもはどうだろう？ こう言えば君を困らせることになるだろうか……。」